

Title	同胞結婚した韓国人ニューカマー女性の移住背景と生活に関するライフストーリー：主体性（agency）に着目して
Author(s)	川端, 映美
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97359
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

同胞結婚した韓国人ニューカマー女性の 移住背景と生活に関するライフストーリー — 主体性 (agency) に着目して —

川端 映美

1. はじめに

植民地支配によって戦中日本に移住してきた在日朝鮮人¹ や子どもたち約60万人は戦後日本に住み続け、東京・大阪など全国各地でコミュニティを築き、生活を営んできた。伴って、日本では在日朝鮮人や在日コミュニティに関する研究、特にジェンダー視点を導入した研究がすすめられてきた。例えば、在日朝鮮コミュニティにおける家父長制や男尊女卑の問題をはじめとして、被抑圧的な在日朝鮮人女性の生活に着目した質的研究（金，2009徐，2012；山根，2017）、韓国人ニューカマー女性の移動や生活に特化した研究も登場し始める（柳，2013；李，2023）。日本における韓国・朝鮮人コミュニティのジェンダー研究は、歴史的な関係性の中で蓄積されてきた。一方で、オールドカマーの二世や三世との同胞結婚をきっかけに日本にやってきた韓国人ニューカマー女性の存在についてはあまり取り上げられていない。彼女たちはどのような背景で在日朝鮮人男性と結婚し、また韓国・朝鮮・日本社会と異なる社会を横断しながら生活を営んできたのだろうか。

本稿の目的は、同胞結婚と呼ばれる韓国・朝鮮ルーツを持つ者同士の結婚によって1970年代以降に日本にやって来た韓国人ニューカマー女性を対象とし、女性の来日背景、生活の諸相についてジェンダーの視点をを用いて検討を行うことである。また、彼女たちから語られた来日背景や生活については移住女性の「主体性 (agency)」に着目し記述を目指す。これら研究目的に即して、本稿のリサーチ・クエスションは（1）同胞結婚した韓国人ニューカマー女性の移住背景はどのようなものであったか、（2）同胞結婚した韓国人ニューカマー女性は日本での生活においてどのような困難を抱えていたのかである。

2. 先行研究

¹ 本稿における「在日朝鮮人」の定義は、第二次世界大戦中に日本による植民地支配の影響で日本にわたってきた朝鮮ルーツの者とその子どもたちとしている。それに対して「在日韓国人」の定義は、戦後就労や結婚を目的として日本にやってきた人びとを指す。本稿では、特に結婚を目的として1970年以降に来日した韓国人女性については「韓国人ニューカマー女性」という名称を用いる。

2.1 韓国人ニューカマー女性の移住背景

韓国人女性の国際的な移動をきっかけとして、1990年以降韓国人ニューカマー女性の移動と生活に関する研究について登場し始める。まず柳（2011:87-88）では、こうした韓国人ニューカマー女性による日本への移住増加の背景について（1）韓国社会における女性の地位向上と賃金労働の主体としての役割変化、（2）経済政策による国内の外国人増加とそれによる韓国人女性の来日動機の形成といった韓国側の要因、（3）日本の外国人労働力の需要増加、（4）日本政府の「留学生10万人計画」による留学生の受け入れ条件緩和、（5）オールドカマーやニューカマーの既存のネットワークによるコネクションといった日本側の要因を含めた計5つの要因をあげている。韓国人ニューカマー女性の来日増加の背景には、韓国経済の動向や日本の制度的要因など相互の国によるプッシュ・プル要因に大きく左右されてきた。このほか、韓国社会における純潔イデオロギーや離婚女性に対する強い偏見などから「避難」してきた女性の存在や結婚仲介業者などの仲介型お見合い結婚によって移住する女性の存在も指摘されている（柳，2013内海・澤，2010；大野，2022）。韓国人ニューカマー女性は日韓の経済的状況及びジェンダー的要因などの複数の構造的要因によって移住を促進されてきた側面があることが窺える。

2.2 同胞結婚

日本における同胞結婚の推移は、1955年737組（構成比66.9%）、1965年3,681組（64.7%）、1975年には7,249組（49.0%）と次第に減少している。1975年以降も同胞間結婚は減少し続けており、2000年以降は10%前後を推移し、2013年には450組となっている（9.0%）²。

在日朝鮮人男性による男尊女卑に関しては、いくつかの在日朝鮮社会におけるジェンダー研究でまとめられている。宋（2009）によると、在日朝鮮人コミュニティは日本の抑圧的な社会・経済的条件のもとにあったことで家父長制を強化し、男系血統を重視する文化において朝鮮人男性は配偶者の国籍にかかわらず「嫁」は家族の文化に同化する対象だと捉えられていたとする。また、徐（2012）によると、植民地期朝鮮社会のほとんどのジェンダー規範は在日朝鮮人社会に引き継がれ、在日女性一世や二世の時代はジェンダー不平等が常態化し、「男性を主、女性を従」とするようなジェンダー規範を自ら内面化していたと指摘する。

以上、同胞結婚と在日朝鮮社会のジェンダー規範に関する先行研究を概観した。戦後韓国社会は近代化に伴って韓国社会や韓国の女性たちに意識変容をもたらし、女性の役割を変化させていた。一方で、在日朝鮮社会は日本による植民地支配などの影響に伴って韓国社会ほどはジェンダー規範に変革はみられなかったのである。これまでの先行研

² 出典：在日本大韓民国民団 (<https://www.mindan.org/old/shokai/toukei.html#>) (2024_05_20 閲覧)

究では、在日朝鮮社会で生活する韓国人ニューカマー女性について詳細に取り上げているものは管見の限りほとんどない。では、在日朝鮮社会に生きる韓国人女性たちは、異なるジェンダー規範を持つ朝鮮・韓国、そして日本社会の狭間においてどのように生活を営んできたのだろうか。

3. 理論的枠組み：主体性（agency）

本稿では、ジェンダー的な構造的制約の中で自律的に選択し、積極的に行動する移住女性の「主体性（agency）」（柳，2013；郭，2020；長谷部，2021；大野，2022；李，2023など）。を捉えるための理論を援用する。長谷部（2021）では、フェミニズムの社会政治哲学がこれまで女性のエージェンシーや「女性が自身で選択し行為する能力」を求めてきたことを踏まえて、結婚移住者女性を「夫についていく主体性のない（そして経済的価値のない）女性」と捉えることをやめ、女性たちの主体性について論じる必要性について主張している。柳（2013）でも、これまでに再三語られてきた移住女性像は、社会に「搾取の被害者」や「抑圧される移住女性」といった負のイメージを植え付け、移住女性を「単純な構造的犠牲者」といった負の認識を与えてきた可能性を指摘し、グローバル経済の中での移住女性の主体性に注目する必要があると主張する。

実際、女性による結婚や移住といった選択肢は、社会構造的なジェンダー規範と結びついていることは否定できず、現在をもって何らかのジェンダー規範に苦しめられている女性たちがいることは事実である。一方で、移住女性が被る差別構造やそれによって生じる苦悩を論じるだけでは、1990年代以前にあった研究のように移住女性たちをある観念的な表象に落とし込み、彼女たちが本来経験している現実を無視することにつながる。それゆえ、本研究では結婚移住者による能動的な選択や行動に関する語りに着目することを目指し、彼女たちの「主体性（agency）」を意識しながら経験を記述する。

4. データ

4.1 データの概要

本研究では2022年9月に筆者が大阪府のある夜間中学で行ったインタビュー調査からインタビュー・データを抜粋して提示している。本調査の対象は、1970年以降に韓国から日本に移住を経験した韓国人女性である。本調査の協力者は、韓国・釜山出身のSさん（70代）と同じく釜山出身のYさん（70代）の2名である。Sさんとは2回のインタビュー（1回目：82分、2回目：67分）、Yさんとは同じく2回のインタビュー（1回目：82分、2回目：67分）を夜間中学の教室内で対面にて行った。

調査者と協力者は、夜間中学の教員立ち会いのもと、協力者以外の夜間中学生を含めた複数人で話す機会が設けられ、その際に本研究の目的について簡単に説明を行って、調査に興味を持ってもらった女性たちに再びアポイントメントを取った。そして、インタビュー当日はルビを振った研究倫理に関する説明付きの承諾書を用意し、口頭と紙面

で内容について確認し、協力者の調査への承諾を得た。インタビューの内容は、同じく承諾を得た上で録音レコーダーとフィールド・ノートに記録している。

4.2 ライフストーリー研究

ライフストーリーとは、一般に個人の語りを指す。また、ライフストーリー研究とは「人間が生きている人生の物語・生の物語・いのちの物語・生活の物語を、ナラティブ（語り・物語）論の立場」からどのように構成され、意味づけられているかに迫る質的研究方法論であるとされる（やまだ，2007: 124）。桜井（2002）は、ライフストーリー研究において「対話的構築主義アプローチ」と呼ぶ、語り手が「いかに語ったのか」といった語りの様式に注目したアプローチを提案する。これには、ライフストーリーが単に過去の経験についての語りなのではなく、語り手と聞き手の〈いま - ここ〉で語られた相互行為による構築物であるという見方に由来する。本研究では、ライフストーリー研究の経験主義的態度にもとづき、女性たちから語られるストーリーもとに韓国人ニューカマー女性の現実構築を目指す。

データ分析では、Polkinghorne（1995）による narrative analysis（「ナラティブ分析」）を援用する。ナラティブ分析は、語られた語りをありのままにプロットとして一つの物語に構成することが特徴である。本研究では、研究対象者から共通点を探ることが目的ではなく、1人の人間の物語として描くことに重きを置いているため等分析を使用する。ナラティブ分析の手続きではデータを全て文字化し、文字化した語りをプロットにして時系列的に結ぶという手順を行う。また語りを時系列的に結ぶことで「人間の経験の時間的・展開的な次元」（Polkinghorne, 1995）に配慮できるとされる。その中で、語り手が示している目的や選択手段だけでなく、一見語りの本質とは関係のない出来事を取り入れることを可能とし、全てを連続的な語りとして構成する。

5. データ分析

本節では5.1～5.4でSさんとYさんから語られたストーリーを【移住背景】と【日本生活】の2つのタームにわけ、時系列的に提示する。

5.1 【Sさんの移住背景のストーリー】

Sさんは韓国・釜山で1947年に祖父、両親のもと3人姉妹の長女として生まれる。Sさんが9才の時に、突然父と母が死去し、一家は両親の死をきっかけにして経済不況に陥ってしまう。当時妹の世話を見る者が「誰もいなかった」こと、Sさんが「長女」だったことで家族の世話をするのに「(家に)こもってやらな」とならず、祖父によるの提案を受け入れ9才で学校を退学する。

そして、祖父による「女の子は19歳になったらそろそろ嫁に行くように」という意向で、Sさんは19歳の時に同じ釜山に住む1歳上の韓国人男性と結婚する。そこで、夫婦

は長男・長女を授かる。しかし、その十数年後に夫が病気で突然死去し、一家は生活困窮に陥る。2人の子どもたちはまだ学生の時であった。

おばあちゃんぐらいの年の人やった。で、あの人「あんまり可哀想やから」、で声をかけてくれました。「子どもを預かれるところがあるの？」って。「妹も2人結婚したけれど、みんな田舎の親がおるから預かるとこはないや」言うて。で、「子ども預かるとこもあるば。私が日本にええ男がおるから。男性がおるから紹介したいやけれど」って。

夫の死後、生活困窮によって子どもたちの生活費や学費を工面するのがむずかしくなる。すると、隣近所に住んでいた女性から在日朝鮮人男性二世のAさんを紹介してもらう。その後Sさんは単身で来日し、Aさんに対面する。Aさんは「朝鮮語で挨拶し」、「子どもも成長は最後までしてやる」と強く子どもの将来を約束してくれたことで、Sさんは「安心してここ（日本）で生きていけるわな」と思ったことを語る。Sさんは「子どももの成長のため」に日本移住を決意する。

親2人はどんな考えでそんななったか知らないけど。子ども3人おいといて、自分2人でおらないようにしてしまったから。今考えたら悔しい。2人おれんかったら、（姉妹）3人どのぐらい寂しいか考えってなかったん違うかな。だから、一生懸命頑張って頑張って、私の子2人は私と同じ人間ならないように育てたから。言葉はわからんくて、でも日本に来ました。[略]私が苦労して子ども2人は幸せになるかどうかからないと心持って日本来たのが、本当に幸せになりました。（ソジュンさんが）全部やってくれました。

両親の突然の死による悔しさ、離学による苦労などを子どもたちには二度と遭わせたくないという気持ちから、自身を犠牲にし2人の子どもたちには教育投資を行ってきた。来日当初は確約されていない子どもたちの将来に不安を抱えていたものの、実際Sさんが日本に移住したことで韓国にいる子どもたち2人には仕送りでき、希望だった大学まで通うことができた。また、「本当の父親のように」育て、経済援助をしてくれたAさんに対して、子どもたちは感謝の言葉をよく伝えているそうである。

Sさんの【移住背景のストーリー】からは、配偶者の死去と経済的困窮による子どもたちの生活費や学費を援助するために日本に移住したことがわかる。

5.2 【Sさんの日本での生活のストーリー】

Sさんは、韓国の知り合いに長男と高校生だった長女の2人を託して44歳の時に1人で日本に旅立つ。来日後は、Aさんと2人で生活を始めるが、家からAさんの工場を行

き来するだけの毎日を過ごしていた。また、Aさんは病院や市役所などの施設に行った際に、文字が読めないために書類の内容を理解できず、自分の名前や住所も書くことができなかつたために毎回大変困惑したことを吐露する。

韓国) おる時は食べていって生きていくので精一杯やったから。勉強もあんなの考えたことなかつたです。こっち来たら、やっぱり何にもわからないできて、向こうの国から育って40年おつたから。(韓国語の) 難しい文字はわからないけど、大体読む、書くのは知つたから。でこっち来たらひらがなもわからない時やったから。挨拶する時も向こうの文字で書いてから挨拶したし。[略] 1年2年、年数がいくたびに悔しさが心にたまってきて。私あの子みたいになつて勉強しとつたら、読みも書きもできるんじゃないかと思って思つた悔しさがある。

Sさんは、日本移住後、9才の時に経験した離学による悔しさを日に日に実感するようになる。韓国では「生きていくのに精一杯」だつたこと、韓国語である程度読み書きはできていたために韓国にいた際は不便さを実感することはなかつた。しかし、日本では全く読み書きができないことによって離学による影響を大きく実感することになる。

Sさんは、民団事務所に出向いた際に日本語学習をできる場について尋ねたところ夜間中学を紹介してもらう。それをきっかけに2018年より夜間中学に通い始める。当時夜間中学に入学し、Sさんはひさしぶりに学校で学ぶことに喜びを感じていたと同時に「学校の門に入るのが怖いぐらいに言葉もわからない、文字もわからない」と不安を抱いていた。入学して4ヶ月後には白内障、婦人科系疾患を立て続けに発症したことで、夜間中学に継続して通えない日が続く。しかし、それでも学校を辞めなかつた背景には当時熱心に指導してくれた先生やわからない問題を教え合う心強い同年代の女性たちがいたからそうだ。

自分がわからないやつが多いから。学校に行くように、(ソジュンさんに) 「あなたも一緒に行つてあかんかね」って。(ソジュンさんは) 「いや、恥ずかしいやから、行かへんわ」言いましたけど。「いや、恥ずかしくない。私は教頭先生と約束した。私の知り合いなんで」って。[略] 聞き取りが知らないから。(ソジュンさん) 来たら一緒に勉強してたら家に帰つて聞いてみたら、ちょっと(日本語が)よくなる思つて。

Aさんは子どものころ、同じ学校の生徒から民族差別を受け、Sさん同様に学校を離学していた。そこでSさんは、学校で理解できなかった日本語を自宅で再度聞くことができるからとAさんを夜間中学に誘う。当初、AさんはSさんと同じ学校に通うこと、女

性ばっかりの夜間中学に通学することを恥ずかしく思い、一度は誘いを断る。しかし S さんは教頭先生に取り合って夫婦であることを秘密にしてもらい、A さんは夜間中学に入学することになる。

また、夜間中学入学までは「何にもできなかった」と振り返る S さんは、夜間中学で学んだ日本語や日本語の読み書きによって自「希望」や「勇気」を持つことができたという。それがきっかけで日本では積極的に人と交流しなかったものの、2、3年ほど前からは、地域の町内会が主催する、河内音頭を踊る集会に同じ夜間中学に在籍する女性と通い始める。こうした盆踊りに参加したこと自体、S さんにとって大きな一歩だった。

5.3 【Y さんの移住背景のストーリー】

Y さんは1955年に釜山にて両親、5歳上の姉と3歳上の兄のもと末っ子として生まれた。Y さんの子どもの時は「勉強が大嫌い」で、学校では1人で過ごすような大人しい性格だったという。

ある日、Y さんは母親の友人に在日朝鮮人男性の W さんを紹介してもらうことになり、両家親戚の立会いのもと釜山市内の喫茶店で W さんとお見合いをする。

ユ：「こういう人がいてるから1回見合いしてみえへんか」って話になってしたんですよ。お母さんの友達が。

*：Y さんのお母さんの友達がお見合いを（提案してくれた）？

ユ：そうそうそう。こういう人があるから。で、その人話聞いてみてみたら、ちょっと分かってみたら、旦那が住んでるところと姉さんの住んでるところは近いんですよ。30分ぐらいの程度なんです。普通言うたら、日本言うたらものすごい離れてるじゃないですか。で話聞いたらちょうど30分かかってるし、そんな近いとこにいてるなんて、そこにものすごい魅力があったんですよ。

*：近いから（笑）。

ユ：私が好きな姉さんが近いところにあるから、「1回見合いしてみます」言うて。あの人が夫が日本の帰り、今日帰る時に、今日12時に飛行機で行くんですよ。喫茶店で今日会ったんですよ、1時間。日本に行く時に。2人とも顔もまともに見てないです。

*：1時間しかない？時間？

ユ：顔も見えないし、喋ったこともないし。それで見合いして、それでそのまま帰ったんですよ。

W さんが日本に帰国するまでのたった1時間だけで、親戚の通訳を介して2人は見合いを行った。しかし、Y さん曰く W さんの初対面の印象はあまり良くなく、実の母親に「私日本で結婚せえへんで」と正直な気持ちを吐露した。すると、母は「あんたがそう思うんやったらもうしょうがないな」と許してくれたのである。しかし、先に同じく在

日朝鮮人男性と結婚し日本に住んでいた Y さんの実の姉宅と W さんの実家が非常に近かったという理由から再度結婚を考え直し、一転 Y さんは W さんとの結婚を承諾することになる。

Y さんの【移住背景のストーリー】からは、親の友人を通じた見合い結婚にもとづく移住だったことはわかる。

ユ：お母さんおいてきたからなんか寂しい。半面、これからどうなるやろうな。国が全然違うでしょ。韓国と日本でしょ。韓国で嫁に来たんじゃないし、日本に行くから他の国に行くから、ほんまに複雑な気持ち言うんですか。日本語で言うたらどんな気持ちか、表現的できへんぐらいで。半面はお母さん、体調子悪いお母さんおいてきたから。また半面に日本行って、言葉も知らん、何にも知らんとこいてどうやってこれから生活する、怖さ。1 からね、子ども育てて、子どもにどういうように日本語が伝えるかとか。

*：お姉さんがいるのは嬉しいけど、やっぱりちょっとほかの面で心配ですか？

ユ：お姉さん会うのは嬉しいけど、やっぱりね、毎日姉さんと生活するじゃないから。私の生活があるから、その不安。

Y さんは当時心臓病を患っていた母親を韓国に置いて日本に旅立つことに不安だった。それに加え、「言葉も知らん、何にも知らん」国で生活することに恐怖感を抱いていた。また、どのように日本語で子どもたちとコミュニケーションを取れば良いのか見当もつかなかった。姉がいることが結婚や移住を決断する一つの理由となったはずが、その当時の心境について「日本語で言うたらどんな気持ちか、表現的できへん」ような「複雑な気持ち」だったと説明している。

5.4 【Y さんの日本での生活のストーリー】

日本移住後は、W さんの実家の 2 階でドユンさんと 2 人で住み、生活することとなる。実家では W さん、W さんの母親と妹の家族で喫茶店を経営していた。来日後、Y さんはすぐに子どもを授かったことで自宅では基本的に主婦業をし、自宅で過ごすことがほとんどであったという。また、これまで日本語を学習したことのなかった Y さんは、日常生活において家族とのコミュニケーションに困ったと語っている。

*：最初その旦那さまとジェスチャーとかで会話してた。でもやっぱりこう伝えたいこととか、なんか伝わりづらかったりとか？

ユ：ほんまにそれね、自分が思ったことを伝えできひんからね。それが 1 番苦しかったね。

*：しんどいこととかも言えない。

ユ：心のあることをね、もう伝わらへんから。それが1番あれやね。もしこれが韓国やったらね、自分の心あることなそのまんま旦那に伝えるけど、日本は言葉ができませんから。[略]言葉一番大事。私もし次生まれ変わったら言葉知らんとこ行きたくない。自分の国で生まれたら国で生きたい。今うちの娘もまだ結婚してないけど、やっぱり言葉知ってる人と結婚してほしいし。知らん言葉と、知らん人と結婚さしたくないし。一番って思ったのはやっぱり言葉。

*：それだけ言葉で苦労してきたってことですよ。

ユ：うん、言いたいこと言われへんとすごく辛いんですよ。言いたいこと、心にこうバーと来るけど、こっちできひんからね。それがもう向こうの言葉やったらやね、バー喧嘩して言うけど、こっちは言われへんからね。私もね、それは我慢して我慢して、ちょっとうつ病もかかりましたよ。

Yさんは、Wさんとの簡単な会話はジェスチャーでコミュニケーションを取っていた。しかし、むずかしいニュアンスを要するコミュニケーションには苦労し、また韓国語のように頭の中にある言葉をそのまま伝えることができなかつたため、フラストレーションがたまり「一番苦しかった」と説明する。喧嘩をした際に何か主張したい時でも「言いたいこと言われへん」状態を我慢し続け、結果的に精神的な病気を患うこともあった。踏まえて「言葉一番大事」と強調し、「もし次生まれ変わったら言葉知らんとこ行きたくない」と切実な思いを語っている。

来日して1年後、Yさんは地元の夜間中学に通うことになる。当時姑のOさんが同じ夜間中学に通っていた。Oさんは夜間中学に登校する前、喫茶店の仕事で疲れて帰ってきているにもかかわらず、髪を整え楽しそうに通学していた姿が印象的であったという。しかし、当時の夜間中学は若者はおらず、初歩的な日本語を知らなかったYさんは授業についていけず1ヶ月で通わなくなってしまう。そのほかに、Yさんは家族との会話の中で日本語を覚えたり、テレビで流れている日本語を聞いて覚えたりもしていた。しかし、日常生活の中で話す人はWさん、子どもたち、姉だけで、地域の日本語教室にも通っていなかったため日本語を体系的に学習する機会はなかった。

子どもらはほんまにいい言葉も教えるんもできひんし、本読みもできひんし、それが1番悔い残ってますねん今。子どもにね、本読むとか。幼稚園からもらってきて、お母さんが書くとこあるじゃないですか。私それも全然書けへんかったもん。やっぱそれが書いてたらよかつたな。[略]子どものことこう書いたり、そんなんができませんからね。それが1番悔しいね。これが韓国やったらやっぱり向こうの言葉でちゃんとかこう書いたり、そんなんちゃんとできたと思うけど。

Yさんは、子どもたちへの本の読み聞かせ、幼稚園での子どもたちの状態や成長を共有するノートでのやりとりをはじめとして読み書きができないことによる育児中において感じた「悔い」を語っている。その上、「今のおかあさん」は幼稚園の教諭に子どもたちの状態をちゃんとつたえる、ノートに書ける親であるとし、それをしてあげられなかった自身の子どもたちは「可哀想」だったと振り返っている。また学校の懇談会では、先生と1対1になって子どもたちの授業態度や成績などについて話し合えないところ、先生の話していることが理解できず、「それが1番辛かった」上に、夫のWさんに懇談会の付き添いを頼んでも「忙しい」と一蹴されたことを語っている。

ユ：「なんで私は日本に結婚して、こんな目に合わなあかんの」とかほんまにほんまに後悔言うんですか？何回もありましたよ。言葉がわからんから。

*：それは来てすぐ？それで韓国に戻る機会とかってありました？

ユ：遊びに遊びに行くことはありました。戻ることはないけど、遊びには行きました。1年1回は行きました。

*：でも、やっぱ日本にずっといようと思ったのは家族とか？

ユ：そうですね。子どもとか。1回は旦那と姑とさんと妹たちとちょっと仲悪かって子どもおいて、ほんまに韓国帰るか思った時も1回ありました。で姉ちゃんどこでちょっと行って、「私日本もうええわ」言うて。「もう韓国帰る」言うて、姉ちゃんに言うたんです。ほんだら「あんた今その気持ちで韓国いたら、飛行機で降りたら、子どものこと考えたらほんまに生きていかれへんで」って。姉ちゃんが言うてくれたんですよ。我慢して、もう1回一緒に（家族で）暮らそう思ったんです。

こうした生活上の困難や制約によって、日本で結婚し移住したことについて自問自答する毎日だった。また、Wさん家族と仲違いしたことをきっかけに子どもたちをおいて韓国に帰ろうと思ったことも告白している。しかし、姉に叱責をくらい思い止まったことが語られている。

日本に移住してしばらく経った頃、Yさんは日本語をすこし話せるようになり、子どもの育児に余裕ができたことでWさんに喫茶店にてアルバイトを始める。しかし喫茶店でのアルバイトを数年続けた矢先、喫茶店は立ち退きすることとなり閉業する。その後、Yさんは喫茶店の閉業で暇になったところ再度夜間中学に通学することを決意する。最初の数年間は、初めて夜間中学に通った時のように授業を理解できず、面白さを実感することはできなかった。しかし、Wさんや子どもたちから「もうちょっと辛抱して行ってみ」と諭されたことをきっかけにしぶしぶ通学し続ける。そこでYさんにある変化が訪れる。

ユ：人の前立ってたら話もせえひんし、人見知りがすごかったし、苦手やし。とにかく

向こう（韓国）では暗い感じ。あんまり人と話してないんですよ。人見たらね、後ろ隠れてるし。友達もあんまりいてないんですよ。[略] 性格も変わったし、言葉もそんなにじゃないけどちょっと大体ちょっとわかるようになったし。性格がだいぶ変わったですね。

*：言っていましたね、その性格変わった。

ユ：性格はだいぶ変わった。

*：それすごくなにか不思議ですよ。

ユ：そうですね、自分も知らんうちにこんなね変わるとは、ほんまに夢に思わなかったけど。周りからも言われます。うちの姉ちゃんにも言われるけど。

現在の姿からは全く想像のつかないほど、Yさんは人見知りな性格であった。しかし、夜間中学に通い始めてから、Yさんの「性格がだいぶ変わった」のである。ここで詳しい理由は明かされなかったが、夜間中学では日本語の読み書きの習得のほかに、熱心な先生に出会えたこと、同じバックグラウンドを持つ韓国人女性たちと「家族のように」よく話したり、行事に積極的に参加し交流していたりすることについて語られたことから夜間中学に通学していたこと自体、Yさんの人格に変化をもたらしたのではないだろうか。

6. 考察

本節では5節で示した分析結果をもとに、冒頭のリサーチ・クエスチョンに対する回答を述べる。まず、リサーチ・クエスチョン（1）同胞結婚した韓国人移住女性はどのような背景で移住したのかでは、①女性による生活戦略としての移住、②在日朝鮮人ネットワークによる見合い結婚にもとづく移住の2点をあげる。まず、①女性による生活戦略としての移住については、Sさんのストーリーで配偶者の死にもとづく家族の経済的困窮とそれに伴う子どもの学費・生活費援助を目的とした移住について語られた。柳（2011：88-89）は、韓国人ニューカマー女性の移住要因の1つに「韓日間の賃金格差」をあげている。1960年代後半に韓国でおきた「漢江（ハンガン）の奇跡」は国内総生産（GDP）をはじめとして韓国社会に長期的な経済発展をもたらした。しかし、韓国より先に経済発展を遂げていた日本とはなお賃金格差はあり、日本でのより良い経済状況を求めて移住する女性たちの存在もいたのである。さらに当時の韓国社会では性別・年齢・階層によって賃金に格差が生じていたことから、Sさんのように離婚・死別した韓国人女性たちの中には、年齢や学歴などによって就労にあたって不利な立場に立たされる可能性もあったのである。当時の社会や経済の状況によって、韓国人女性たちは移住をせまられるような構造にさらされていたのではないだろうか。

②は在日朝鮮人ネットワークによる見合い結婚にもとづく移住である。協力者2人の移住背景は、知り合いの紹介を通したお見合い結婚に伴う移住でもあった。柳（2013：

114-117) は、在日朝鮮人の親戚や友人による「インフォーマル・ネットワーク」にもとづく見合い結婚とそれに伴う韓国人女性の移住を指摘している。調査地である大阪府は韓国・朝鮮ルーツによる最大のエスニックコミュニティがあることで有名である。例えば、Yさんの姉も在日朝鮮人男性と結婚していたことから、Yさん家族は在日朝鮮人ネットワークといくらにかちかち関係にあったことが推測される。また、在日朝鮮社会では配偶者選択にあたって同胞結婚を推奨する背景もあったことから、ネットワークの強かった1970年代頃にはめずらしくない移住方法だったのかもしれない。しかしながら、Yさんによるストーリーからは、家族や知り合いの結婚願望に合わせた訳ではなく、あくまで自身の選択にもとづく結婚及び移住であったことが示唆された。単に見合い結婚と言っても、彼女の自由意志による結婚だったことは強調したい。

次は、リサーチ・クエスチョン(2) 同胞結婚した韓国人ニューカマー女性は日本での生活においてどのような困難を抱えていたのかの回答である。協力者2人に共通していた生活上の一番の困難は、「言語」であった³。Sさんは公的機関での読み書き、Yさんは家族とのコミュニケーションや子どもの学校での先生とのやり取りなどに困難を抱えていた。背景としては、来日後の日本の生活や家事、子育てなどに慣れるために時間を費やさねばならなかったこと、自宅と仕事場の往復だけの生活で日本語学習に時間を十分に取れなかった。こうした生活における制約は新たな情報へのアクセスや社会関係の構築を妨げ、生活に必要な情報にリーチできない「情報弱者」になる可能性も高くなる(富谷他, 2009)。またSさんの場合、韓国にいる子どもたちと離れて暮らす心的ストレスや病気の発症、Yさんの場合は夫による子育ての無理解や義家族との関係不和などの問題もみられた。彼女たちの置かれていた生活は社会的・経済的に非常に制約されていたに違いない。しかしながら、先行研究でみられたような在日朝鮮人男性による妻への強いジェンダー規範やジェンダー不平等についてはあまり語られなかったのも事実である。例えば徐(2012)では、韓国社会におけるイエ規範によって女性は夜間中学の場などで日本語を学習する時間や機会を奪われて、同胞女性との交流も禁止されていたケースなどが指摘されていた。他方、本研究の協力者2人による語りでは夜間中学での就学及び同胞女性との交流などについて制約されてはおらず、むしろ積極的に通学を後押しする姿や一緒に学校に通う姿などの協力的な一面をみることができた。彼女たちの生活は構造的に制約されていた面もあったが、一概にジェンダー規範や不平等を反映した生活ではなかったことが窺える。

7. まとめ

本稿では、同胞結婚した韓国人ニューカマー女性の移住背景と生活にまつわるライフストーリーから、女性たちのさまざまな移住背景や生活の一部について明らかにするこ

³ 結婚移住女性の生活における言語の困難については伊藤(2007)、富谷他(2009)、新矢・棚田(2018)など多数の論考で詳細に説明されている。

とができた。彼女たちのライフストーリーからは、社会的・経済的に制約されながら自身や家族の生活のために自己犠牲を払ってまで積極的に行動する「主体性」を垣間見れた。彼女たちのストーリー後半では夜間中学に入学したことによる社会関係の構築、人格形成の変化もみられた。夜間中学に入学したこと自体、彼女たちにとって大きな決断であったことに違いはないが、通学を継続し、自分自身で道を切り拓いてきたのである。しかし、自国及び日本で構造的に抑圧された生活の中で困難を抱えることもしばしばあったことから、女性たちの移住背景や生活を見るには構造的な社会的要因及び主体性の両方を見ていくことが望まれる。また、本研究において2人の経験しか取り上げられなかったことはきわめて限定的な結果になった。現在日本にはさまざまなルーツやバックグラウンドを持った移住女性が存在する。今後さまざまな背景で移住してきた女性たちを取り上げていくことで、彼女たちを取り巻く構造的な規範や生活の諸相を個別に明らかにできるだろう。

参考文献

- 李善姫（2023）『東北の結婚移住女性たちの現状と日本の移民問題 不可視化と他者化の狭間で』明石書店
- 伊藤孝恵（2007）「国際結婚夫婦のコミュニケーションに関する問題背景 —外国人妻を中心に」『言語文化と日本語教育』, 33, pp. 65-72
- 内海由美子・澤恩嬉「韓国人女性はなぜ日本に結婚移住するのか—山形県における聞き取り調査の結果に見るプッシュ要因—」『山形大学留学生教育と研究』 pp. 13-29
- 大野恵理（2022）『「外国人嫁」の国際社会学 「定住」概念を問い直す』有信堂
- 金富子（2012）『植民地期朝鮮の教育とジェンダー 就学・不就学をめぐる権力関係』世織書房
- 金美善（2008）「移民女性と識字問題について 夜間中学に学ぶ在日コリアン一世の識字戦略」 「ことばと社会」編集委員会『ことばと社会 11号 —多言語社会研究 特集：移民と言語 1』三元社
- 郭笑蕾（2020）「国際結婚移住女性の主体性と生活戦略」『三田社会学』, 25, pp. 127-130
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 徐阿貴（2012）『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成 ——大阪府の夜間中学を核とした運動』御茶の水書房
- 宋連玉（2009）『脱帝国のフェミニズムを求めて 朝鮮女性と植民地主義』有志舎
- 富谷玲子・内海由美子・斉藤裕美（2009）「結婚移住女性の言語生活 —自然習得による日本語能力の実態分析—」『多言語多文化：実践と研究』, 2, pp. 116 -137
- 橋本みゆき（2005）「新聞投書欄における在日韓国・朝鮮人の「結婚問題」」『年報社会学論集』18号, pp. 101-112

- 長谷部美佳（2021）『結婚移民の語りを聞く インドシナ難民家族の国際移動とは』ハーベスト社
- やまだようこ（2007）『質的心理学の方法—語りをきく』新曜社
- 山根実紀・山根実紀論文編集委員会編（2017）『オモニがうたう竹田の子守唄 在日朝鮮人女性の学びとポスト植民地問題』インパクト出版会
- 柳蓮淑（2011）「韓国女性の国際移住に関する要因分析——1980年代以降における就労目的での来日事例から——」『ジェンダー研究』第14号，pp. 83-98
- 柳蓮淑（2013）『韓国人女性の国際移動とジェンダー グローバル化時代を生き抜く戦略』明石書店
- 柳蓮淑（2014）「国際移動から韓国の家族を問う ——ディアスポラとしての韓国人ニューカマー女性」 pp. 174-214 平田由紀江・小島優生（2014）『韓国家族 グローバル化と「伝統文化」のせめぎあいの中で』叢書
- Polkinghorne, D. (1995) Narrative configuration in qualitative analysis. *International Journal of Qualitative Studies in Education*. 8, pp.5-23